「媒介者」としての翻訳

—— 丹羽純一郎訳『欧州奇事花柳春話』を視座に

Osamu TAKAHASHI (高橋修 : Professor of Kyoritsu women's junior college)

✉ hae04742@nifty.ne.jp

(日本) 共立女子短期大学教授。日本近代文学。文学博士。『明治の翻訳ディスクール——坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』(東京：ひつじ書房, 2015)、『主題としての(終り)——文学の構想力』(東京：新曜社, 2012)、コレクションモダン都市文化『アナキズム』(東京：ゆまに書房, 2010, 編著)、『少女少年のポリティクス』(東京：青弓社, 2009, 共編著)、『ポストコロニアルの地平』(横浜：世織書房, 2005, 共編著)、『ディスクールの帝国——明治三〇年代の文化研究』(東京：新曜社, 2000, 共編著)など。

The Cultural Mediations of Translation, focused on *Karyū Shunwa*

: *Ōshū Kiji* Translated by Niwa Jun'ichiro

Karyū Shunwa : *Ōshū Kiji*(1878) is Niwa Jun'ichiro's combined translation of Edward Bulwer-Lytton's two novels *Ernest Martravers*(1837) and *Alice*(1838), which were popular at the time but have been forgotten and don't feature in the canon of British literature. However, the translation played a profound role in the establishment of modern Japanese literature, despite being concerned with a distant culture and a different time. It was widely read by students who were open to new artistic perspectives, and it vividly conveyed the translator's novel Western views on love, humanity and folk culture.

However, Bulwer-Lytton's novels were not translated from English into ordinary Japanese. Instead, they were translated into kan-bun-kundokutai, which was a kind of literary Japanese that was based on the literal translation of Chinese. This linguistic register reflected the worldview of the Japanese intelligentsia of that time, and Jun'ichiro was a pioneer in producing translations in this style.

How does this translation interpret and abbreviate the original *Alice* and *Ernest Martravers*? In addition, 37 years later in 1925, Shu Soken translated Jun'ichiro's translation into a Chinese version of the text entitled *Kyōenki*. What is the precise relationship between this translation and *Karyū Shunwa*? These are the questions through which in this paper I would like to discuss whether *Karyū Shunwa*, which was translated into the Chinese-derived kan-bun-kundokutai, conversely mediated the Chinese translation, and how novels of personal development (Bildungsroman) written in English-speaking countries were received in East Asia.

Keywords *Karyū Shunwa*(『花柳春話』), Bildungsroman(教養小説), Kanbun Reading Style (漢文訓読体), Confucian Ethics(儒教倫理), Mediation(ミディエーション)

1 はじめに

『欧州奇事花柳春話』の原作である『アーネスト・マルトラヴァース(Edward Lytton, Ernest Maltravers)』(1837年)と『アリス(Alice)』(1838年)は、本国イギリスの文学史でもすでに忘れ去られるような通俗小説とされます。しかし、その翻訳は意外にも時間的にも空間的にも遠く隔たった日本の近代文学の成立に深い関わりをもつことになりました。1878年、イギリスから帰国した丹羽(織田)純一郎によって生硬な漢文訓読体で翻訳され、出版元のねらいどおり新しい小説の出現を待っていた当時の書生たちの間に広く受け入れられました。そこには訳者がとらえた新しい西洋の恋愛観・人間観・習俗が鮮やかに映し出されていました。

ただし、西洋(英語圏)の小説を直接「日本語」に翻訳したわけではありません。漢文訓読体という、当時の日本人が理解する漢文学的な言語・世界観を媒介にして訳され、それ以降、同趣向の翻訳を生み出す先駆的な存在となりました。では、こうした翻訳によって、原典である『アーネスト・マルトラヴァース』がどのように切り取られることになったのでしょうか。また、37年後の1925年に周瘦鵬によって「鏡圓記」というタイトルで中国語に翻訳されましたが、この翻訳と『花柳春話』との間には繋りがあったのでしょうか。つまり、漢文訓読体で翻訳された『花柳春話』は、逆に中国語訳の成立を媒介することになったのかどうか、その検討をとおして、東アジアにおいて英語圏の教養小説がどのように受け止められたのかを考えてみます。

『欧州奇事花柳春話』装丁

2 『花柳春話』の受容

『花柳春話』の文体の例を紹介してみますと、マルトラバースが友人からもらった書簡の一部は次のように記されています。

足下^{タツゲ}富豪^{ブコウ}ノ家ニ生レ 経済^{ケイギ}ノオヲ保チ 百書^{ヒャクショ}ニ涉リ 而シテ徒^タヅラニ^{イロキ}幽居^{ユウキ}シテ
堆^{ツヅミ}書^{ショ}塵埃^{ジンアイ}ノ裡ニ身ヲ屈シ爲ス アルベキノオヲ以テ僅ニ著書^{ショショ}筆舌ノ間ニ費ヤスハ[た
んに著述家^{ショツツカ}で終わるのは] 營^{エイ}ニ策^{サク}ノ下ナルノミナラズ 抑^ヨ、赤上帝^{シヤウツツ}ノ意ニ違反^{イハン}スル者

ト謂フベシ。足下ノ才 詩人トナツテ終ル能ハザレバ 速カニ大志ヲ立テ功ヲ天下ニ
挙ゲ以テ衆庶平安ノ策ヲ立テヨ。(四十七章)

と、リズムカルで時に大志を立てることを鼓舞するような「漢文訓読体」で書かれています。前田愛氏はかつて『花柳春話』が「人情本や中国の情史を愛好し、『花月新誌』や『東京新誌』を購読する書生たち」²³を想定していると述べましたが、まさに漢学の教養を積み、理想的な恋愛と立身出世を夢見るような書生たちに向けて書かれていたといえるでしょう。

一方、原文の内容は以下のようなものです。

小説の中心人物のアーネスト・マルツラバースは、イギリスの富裕層出身の青年で、ドイツ留学中にゲーテの『ヴェルヘルム・マイスター』の洗礼をうけ、教養小説風の生き方を実践しています。一方の、ヒロインのアリスは、母を早くに失い、盗人の父と荒野に二人住まいで、教育をまったく受けていません。それゆえに自然の善性をもっている。ルソーの『新エロイズ』(1761年)のジュリーのような存在です。この階層も教養も異なる二人が、数々の試練を乗り越えて、最終的に結ばれるというものです。背後にゲーテの『ヴェルヘルム・マイスターの修行時代』(1789年)と、ルソーの『新エロイズ』(1761年)の物語が響いています。

二人は愛を確かめ合うような関係になった直後、思わぬ事件に巻き込まれ、十数年間離れ離れになります。マルツラバースはアリスを一生懸命探しますが、見つけることができず、そのあと傷心の旅を続けます。何人かの女性と恋に陥り、結婚寸前まで進むのですが、さまざまな障害があつて、結婚話は頓挫してしまいます。しかし、これらの女性たちや友人のアドバイスに従い、人生の目的を立て文筆家になり、後に政治家ともなつて、社会的な活動をはじめます。正にビルディングスロマン的な展開となっています。

一方のアリスは、マルツラバースの子を出産し、こちらも放浪の旅をしています。心優しい女性に救われ、音楽教師としてなんとか生きつないでいます。その人柄と、容貌が認められ、一応再婚もしています(のちに死別)。

この二人が、波乱万丈の人生行路ののち、運命の糸に操られるように再会し、最後に晴れて結ばれるところで話が終わります。いわば、通俗的でスリリングな恋愛遍歴譚といえますが、それを『ヴェルヘルム・マイスター』と、『新エロイズ』を下敷きにしながら、イギリス風の教養小説として仕立てあげられていると考えられます。

では、この翻訳小説は日本ではどのように受け止められてきたのか。

その理解の鍵とされてきたのが、『花柳春話』巻頭に掲げられた、成島柳北による「題言」です。そこには次のように記されています。

²³ 前田愛「『花柳春話』の位置」(『明治文学全集』月報71, 1792), p.2.

礼運ニ云ハズヤ。人情ハ聖王ノ田也ト。情無ケレバ。聖人モ亦食ラハズシテ死セ
ン歟。聖既ニ多情。痴固ヨリ多情。然ラバ則全地球上一切情界ノミ。固陋学士ハ云
フ。泰西諸国ハ。人々実益ヲ謀リ。実利ニ説キ。敢テ風流情痴ノ事を問ハズト。是
極メテ妄誕。余嘗テ航遊一年。親シク看破シ来ルニ。彼我ノ情相契ス。毫モ差異無キ
ナリ。(下線部引用者)

「礼運」(『礼記』の一節)にいうように、人間関係における「人情」は徳の高い君主を育む
耕地のようなものだ。聖人も「多情」だとすれば、すべての人間は「多情」ということにな
り、「然ラバ則全地球上一切情界ノミ」だと断言しています。これまで日本では、ヨー
ロッパ諸国の人々は「実益」「実利」のみを求めて、「風流情痴ノ事」(恋愛とその感情)を問
題にしないと考えられてきましたが、それは「妄誕」(誤解)であるということです。「全地
球上一切情界ノミ」——成島自身の洋行体験からしても、西洋と日本の「情」は全く同じ
で、毫も違いがないとし、『花柳春話』はこうした「情」を写した「情史」であると力説して
います。

ここでいう、「風流情痴」——物語の縦糸とされる男女の間の人情・恋愛と、それに促
される立身出世という生き方は、書生たちの〈夢想〉とも合致し、新たなテキストを生成
する力を持っていくことになりました。『花柳春話』の後に著された小説、『鴛鴦春話』
(1879年)、『春風情話』(1880年)、『花柳情譜』(1880年)、『艶才春話』(1882年)の題目を見
ただけでもその影響力の大きさが窺われます。

また、しばしば「訳者云ク」という形で、訳者が本文中に現れ、固有名詞や英国の風
俗、政治制度の説明をしたりしています。イギリスの文化紹介の側面もありますが、と
くに結婚制度、その習俗について数多く述べられています。

例として「歓娛月(ほねーむうん)」については以下のように述べられています。「訳者
云ク 英国ノ風俗 夫婦婚礼終テ或ハ外国ニ又ハ他所ニ往キ 一二月ヲ歓娛ノ中ニ送ルヲ以
テ例ト為ス。之ヲ名ヅケテ(ホネームウン)ト云フ」(附録十章)。さらに「合歓餅(ウェ
ディングケーキ?)については次のように説明されています。「[英国ノ風俗婚姻ノ席ニハ
必ズ一種ノ餅ヲ用ユ。之ヲ呼テ合歓餅ト云フ。礼終ルノ後チ之ヲ諸友知己ノ者ニ配布ス
ルヲ例ト為ス」(附録十二章)と記されています。訳者の、読者への配慮と意図するところ
が見えています。

3 枠組みとしての漢文訓読体

では、漢文訓読体で訳されたことが、物語にどう作用しているのでしょうか。

漢文学的な知識・素養は、日本において長らく知識階層の必須の教養でした。とは
いっても、中国の思想を全て受け入れるというのではなく、体制維持、秩序維持と結びつ
いた道德規範・倫理としての儒教の教えが武士階級にとって重要な意味をもっていたと

考えられます。それは、「修己治人」(己を修めて人を統治する)という儒教の基本理念にも繋がっています。こうした儒教の受け止め方自体が、典型的な文化翻訳だったわけですが、これがプロテスタンティズムに貫かれた西洋的な人格形成の物語を手繰り寄せる枠組みとして機能していたと思われます。

具体的にいえば、原文のなかに繰り返し記されていた、マルツラバースと女性たちの恋愛が、強固な義と不義、また理(道理)と情という二項対立的な倫理観に、落とし込まれて理解されることに表れていると思われます。とくに既婚者であるペンタドア夫人との恋愛において明らかです。文字通り義と不義、理(道理)と情、いわば情理の対立と、その葛藤がマルツラバースの「人情」として前面に押し立てられているといえます。そして、両者の「情」が強調され、あやうく不義に陥るギリギリのところで「理」が選択される場面が繰り返され、その針が振り切れそうになった時に、マルツラバースは「志」を立て最終的に政治家となる道を選ぶことになります。訳文では以下のように記されています。

今眼前ニ操婦ヲ見テ情夫、僕ノ如キモ亦将ニ、志ヲ立ントス。早く去テ人道ノ善ヲ学ブベシ。君速カニ僕ヲ忘レ断然愁思ヲ絶テ 疾病ノ源ヲ招ク勿レ。自後世人若シ僕ヲ称スルアラバ 則チ君ノ高論ニ由テ行ヲ改ルノ効微ナリト知レ。(第二十章)

ペンタドアが「情」に動かされながらもそれを否定し、「理」を選択し「操」を全うしようとするのを眼前にして、自身も「情」を捨て「理」に生きようと決意する。いわば、「情」と「理」の対立構造から、マルツラバースの「立志」が一見脈絡なく突然頭をもたげてきます。西洋的な恋愛小説が姦通小説だとすれば、むしろ、儒教的倫理が男女を分け隔てる強固な障壁(障害)として機能し、それが禁止と違反という物語を作動させる動力となって、作中人物を新たなステージに推し進めているといえるでしょう。

それは立志を促すだけではなく、「貞操」を守るという倫理が、結末で二人を結びつけることとなります。遊女でありながらも「真情」を傾け節操を守ることが、大団円に向かわせる為永春水流の人情本というジャンルの小説作法とも重なっているといえることができます。

「花瓶ヲ隔テ、マルツラバース中情ヲ
ペンタドアニ説ク図」(第十九章)

『欧州奇事花柳春話』第十九章挿絵

4 『花柳春話』の結末

さて、1890年代以降、日本の小説が中国で多数翻訳されたのは知る通りです。梁啓超訳『佳人之奇遇』(1898年)、『経国美談』(1899年)、熊垓訳『雪中梅』(1903年)などの政治小説、『八十日間世界一周』(1900年)、『十五少年』(1903年)などの冒険小説等、数多く上げられます。その翻訳を主導した梁啓超は、西洋的な近代化に成功したかのように見えた日本の維新体験から多くのものを学ぶべきだと考え、とくに国民を啓蒙するために受け入れられやすい小説に注目しました。この意味では、明治初期に日本で強い影響力をもった『花柳春話』は必ずや翻訳されていると推測されますが、なかなか見つかりませんでした。

しかし、調査していく過程で、訳されなかった理由がおぼろげながら見えてきました。一つには、中国の才子佳人小説のような旧いタイプの「情史」は、「誨淫誨盜」の書(淫らなことや盗みを教える書)として批判されていたこと(梁啓超『変法通義』)。二つ目は、1890年代後半にはリットンの政治小説はもう古くなっていて、翻訳する価値が薄れていたとされます(陳平原『中国現代小説の起点——清末民初小説研究』北京大学出版社、2010年)。いずれも納得できる理由です。

こうして調査が難航している時に、中国の漢字文化を研究しているクリス・ロウイイ(Chris Lowy)氏のご好意で、1925年にいわゆる鴛鴦胡蝶派といわれる「周瘦鵠」(しゅう・そうけん)によって上海で翻訳された「鏡圓記」²⁴という資料を手に入れることができました。原著者名は「愛得華笠頓(エドガー・リットン)勳爵」と記され、その漢字表記は、坪内逍遙訳『慨世士伝』の著者名「ロルド笠頓翁」にも通じており、日本語から重訳の可能性もありました。

このつながりを明らかにすれば、まず西洋のロマン主義的な恋愛譚が日本語に翻訳され、しかも漢文学的世界観をもとに翻訳される、それをもとに、中国本土で改めて中国語で翻訳される、そこに東アジア翻訳圏の鎖の様な連鎖(ループ)が見て取れると思われました。しかし、残念ながら直接的に参照している形跡は見いだせませんでした。

それは小説末尾の部分からも明らかです。原文と、日本語訳と、中国語訳の三つをそれぞれ比べてみます。

まず、原文は次のように記されています。

Maltravers once more entered upon the career so long suspended. He entered with an energy more practical and steadfast than the fitful enthusiasm of former years. And it was noticeable amongst those who knew him well, that while the firmness of his mind was not impaired, the haughtiness of his temper was subdued. No longer despising Man as he is, and no longer exacting from all things the ideal of a visionary standard, he was more fitted to mix in the living World, and to minister

²⁴ 『心弦』(大東書局、1925)所収。

usefully to the great objects that refine and elevate our race. His sentiments were , perhaps, less lofty, but his actions were infinitely more excellent, and his theories infinitely more wise.

Edward Lytton, *Alice* (1838年)

(大意)アリスとの愛の復活によって、マルツラバースは以前よりも、安定した実践的なエネルギーをもって再び仕事を始めた。気性の傲慢さは抑えられ、実際的でない理想を追うのをやめて、生きている世界(現実世界)に適合した。人類を高尚にする目的に適い、行動は優れ理論はずっと賢明になった。

原文は、ビルディングスロマンの物語に最後までこだわり、性格の陶冶という人格形成や、地に足のついた調和的な自己形成が実現されるという、まさに教養小説的な結末となっています。また、マルツラバースとアリスの再会を「Nature」が祝福するという形で、ルソー的な自然に導かれた二人の関係が強調されています。ただし、結婚する場面までは描かれていません。

つづいて日本語訳の『花柳春話』(1878年)の結末を見ます。

(リスリイとモンテインの)兩人媒^{なかにち}酌トナリマルツラバーストアリス^{アリス}トヲ婚姻セシメンコトヲ定ムレバ マルツラバースハ既ニ^レラムリノ死セルヲ以テレガードニカメロン^{カメロン}ヲ娶^めシコトヲ勸メ 其翌日婚姻の礼ヲ行ヒ 兩夫婦ハ回春ノ思ヲ為シテ リスリイヲ伴ヒモンテインニ別レテ英國ニ歸リ 子孫繁榮シテ其家倍々盛昌ヲ致セリト云爾。(第六十六章)

マルツラバースとアリスの娘カメロンが結婚した後の小説末尾です。波線部がとくに興味をひきます。「子孫繁榮シテ其家倍々盛昌ヲ致セリ」という、すべての話がまとまり、子孫も家も栄えるという読本的、また人情本的な再会を果たす大団円が示され、物語が閉じられています。いわば、先行する物語の型に倣っているといえます。

『花柳春話』における「恋愛と結婚」を論じた前野みち子氏は、マルツラバースとアリスとの結婚が当時の読者に与えた衝撃を以下のように述べています。

両性の相互的愛情を前提とする恋愛→結婚型の「自由結婚」への関心はむしろ、明治十一年に『花柳春話』がベストセラーになるに及んで漸く青年知識人層(書生層)の関心を惹く現実的な大問題になった。あるいはこの翻訳によって初めて彼らは西欧的男女関係と「情」に基づく結婚に関する具体的な知識を得ることになったようにみえる²⁵。

25 前野みち子「明治初期翻訳小説『欧州奇事花柳春話』における恋愛と結婚」(『論集：異文化としての日本』名古屋大学大学院国際言語文化研究科, 2009), p.157.

『花柳春話』が新しい「自由結婚」のイメージを示しているのは間違いありません。読者へのインパクトも推測できます。しかしながら、マルトラバースとアリスが十年のを隔てて結婚できたのは、アリスが「貞操清淑」を守り「婦道」を誤らなかったから、「上天其ノ貞節ヲ慰ミ 君ヲシテ他人ヲ嬖ラズシテ 遂ニ君ニ再会セシメタルモノナリ」と作中人物の書簡のなかで語られます。これこそが物語の縦糸になされています。ここからも、前野氏が指摘するするような、漢文脈を持つ「儒教的拘束力」の強さがうかがわれます。

では、中国語訳である周瘦鵬による「鏡圓記」(1925年)の末尾を考えてみます。次のように記されています。

愛麗絲(アリス)說到這裏再也說不下去但已說得夠了馬屈浮(マルトラバース)早把伊緊緊的摟在胸口於是他又覺得先前愛他崇拜他的那顆心又貼在他的心上跳動了這夏季末一月亭午的暖日閃閃地照在那些芬芳的花上遠處一片大海風平浪靜海面上似乎現著黃金色快樂的笑容愛麗絲很柔媚的低低說道『唉—唉我不問我們別後你愛上了旁的人只問你此刻可愛我不愛』

(二人が抱擁し合う場面)夏の暮れに、昼の暖かい日差しは、キラキラと花々に降り注ぎ、遠くの海は静かに、水面には黄金色の笑みを見せているように輝いた。アリスは柔媚に、「ああ、別れた後に他の人を愛してたことなんか聞きませんよ、ただ今私のことを愛しているかどうかを教えて」と小声で囁いた。(何雅琪訳)

1950年代のセンチメンタルなアメリカン・ムード歌謡の歌詞を思わせるような終わり方のようにも見えます。「鏡圓記」の50年前に訳された『花柳春話』と明らかに異なった文脈で翻訳されたと考えられます。すなわち、1920年代以降の「自由恋愛が文学作品のなかで市民権を得た」²⁶とされる時代に、文化消費が盛んであった「上海モダン」とされる時空間のなかで、鴛鴦胡蝶派の作家によって大衆的な恋愛小説として翻訳された。この意味では両者の違いは当然かもしれません。相互媒介的な翻訳文化圏のようなものを想定することはできません。

周瘦鵬訳「鏡圓記」『心弦』
(1925年)所収

5 おわりに

しかしながら、ここから別の問題を見て取ることができると思われます。まず、

²⁶ 張競『近代中国と「恋愛」の発見——西洋の衝撃と日本文学交流』(岩波書店、1995)、p.151.

注目しなければならないのが、原文で強いこがわりをもっているビルディングスロマンの要素が薄められている、というより消されていること。それと重なることですが、ロマン主義的な「自然」の感情に導かれる恋愛というルソー的なテーマも見えていません。

雑駁な言い方ですが、これこそが東アジア的な受容のあり方だったといえるのかもかもしれません。ロマン主義的な個人の解放、人格の形成という物語には十分に目が届かない。それは、秩序維持が第一である儒教的人間観と、対社会的な概念として培われてきた西洋流の個人のイメージが大きく隔たっていることから来るのかもしれませんが。それゆえ、社会のなかで、自己覚醒し、自己を確立していくことを念頭においている教養小説的な要素が脱色され、才子佳人型の恋愛物語という縦糸が中心にせり上がってきていると考えられます。『花柳春話』と『鏡圓記』は、まったく異なった文脈で訳されているようにみえて、両者ともに男女の恋愛、情事に関する事柄を題材とする伝統的な「情史」²⁷という枠組みの中にすっぽり納まっているように見えます。相互媒介的とは言えませんが、両者の根本的なコンセプトは重なっているといえるでしょう。改めて西洋文学の受容における東アジア文化圏の類同性を見る思いがします。これはリットンの『アーネスト・マルトラバーズ』という小説の受容の問題に限ってのことなのですが、19世紀から20世紀初頭における、西洋の恋愛小説との東洋的な関り方がおのずと表れているといえるのではないのでしょうか。

今後はこうした問題が、西欧文学の翻訳事情が異なるインドネシアはじめ東南アジアの文化受容と、いかに繋がっているか、もしくは断絶しているのかを考えて行きたいと思います。

付記 この論文は、基盤研究(C) 19K00328「東アジアにおける翻訳ディスカールの様態と受容に関する文化研究(代表吉田司雄)の基金によって執筆されたものである。

参考文献(Bibliography)

- 齋藤希史(1991)「〈小説〉の冒険——政治小説とその華訳をめぐって」『人文学報』第69号、京都大学、pp.1-29.
Saitou, Mareishi(1991) Shousetsu no bouken : Seijishousetsu to sono Kayaku o megutte. *Jinbungakuhou* No. 69. Kyoto Daigaku. pp.1-29.
- 張競(1995)『近代中国と「恋愛」の発見——西洋の衝撃と日本文学交流』。東京：岩波書店。Chou, Kyou(1995) Kindai Chyugoku to 'renai' no hakken : seiyō no syogeki to nihonbungaku kouryu. Tokyo : Iwanami shoten.

²⁷ 齋藤希史によれば、「明治初年、漢文の教養になお依拠し、〈近代〉的文学概念をいまだ所有しなかった知識人たちは、男女の情の絡み合いを経として展開するテキストを、即ち旧社会の土人文学では扱いきれなかった主題を展開するテキストを、西洋の小説であろうと江戸の人情本であろうと中国の才子佳人ものであろうと等しく「情史」と呼んでいたとされる。」「〈小説〉の冒険——政治小説とその華訳をめぐって」『人文学報』第69号、1991)、p.12)

- 安永立子(1998)『『花柳春話』の「人情」と新たな物語の成立』『国語国文研究』第110号、北海道大学、pp.14-31.
 Adachi, Ritsuko(1998). *Karyu Shunwa no 'ninjou'to aratana monogatari no seiritsu. Kokugokokubunkenkyu*
 No. 110. Hokkaido Daigaku. pp.14-31.
- 神谷まり子(2004)「鴛鴦胡蝶派と上海娯楽文化」『アジア遊学』No. 62. pp.99-108. Kamiya, Mariko(2004)
 Enoukouchouha to Shanghai gorakubunka. *Asia Yugaku* No. 62. pp.99-108.
- 張競(2008)『「情」の文化史——中国人のメンタリティー』、東京：角川書店. Chou, Kyou(2008) 'Jou' no
 bunkasshi : Chugokujin no mentality. Tokyo : Kadokawa shoten.
- 前野みち子(2009)「明治初期翻訳小説『歐洲奇事花柳春話』における恋愛と結婚」『論集：異文化としての日本』名
 古屋大学大学院国際言語文化研究科. pp.153-162. Maeno, Michiko(2009) Meiji shoki honyaku shosetsu
 'Ohshu Kiji Karyu Shunwa' ni okeru renai to kekkon. *Ronshu : Ibunka toshiten Nippon*. Nagoyadaigaku
 daigakuin kokusai gengobunka kenkyuka. pp.153-162.
- 陳平原(2010)『中国現代小説の起源——清末民初小説研究』、北京：北京大学出版局. Chin, Heigen(2010) Chugoku
 gendai shosetsu no kigen : Shinmatsu Minsho shosetsu kenkyu. Pekin : Pekindaigaku shuppanyoku.
- 高橋修(2015)『明治の翻訳ディスクール——坪内逍遙・森田思軒・若松賤子』、東京：ひつじ書房. Takahashi,
 Osamu(2015) Meiji no honyaku discours : Tsubouchi Shoyo, Morita Shiken, Wakamatsu Shizuko. Tkyo :
 Hitsuji shobou.
- 仲玉花(2017)「梁啓超の翻訳活動について——1900年前後の翻訳活動を中心に」『或問-WAKUMON』32号、
 pp.46-56. Chou, Gyokuka(2017) Ryou Keichou no honyaku katsudou ni tsuite : 1900nen zengo no
 honyaku katsudou o chushinni. *WAKUMON* No. 32. pp.46-56.